



第 49 回


日本人工関節学会が

2月15日（金）～16（土）に
東京 京王プラザホテルにて
開催されます。

当院からは

整形外科部長 人工関節センター長
リハビリテーションセンター長
内藤 浩平 先生が

学術発表されますので、ご紹介します。

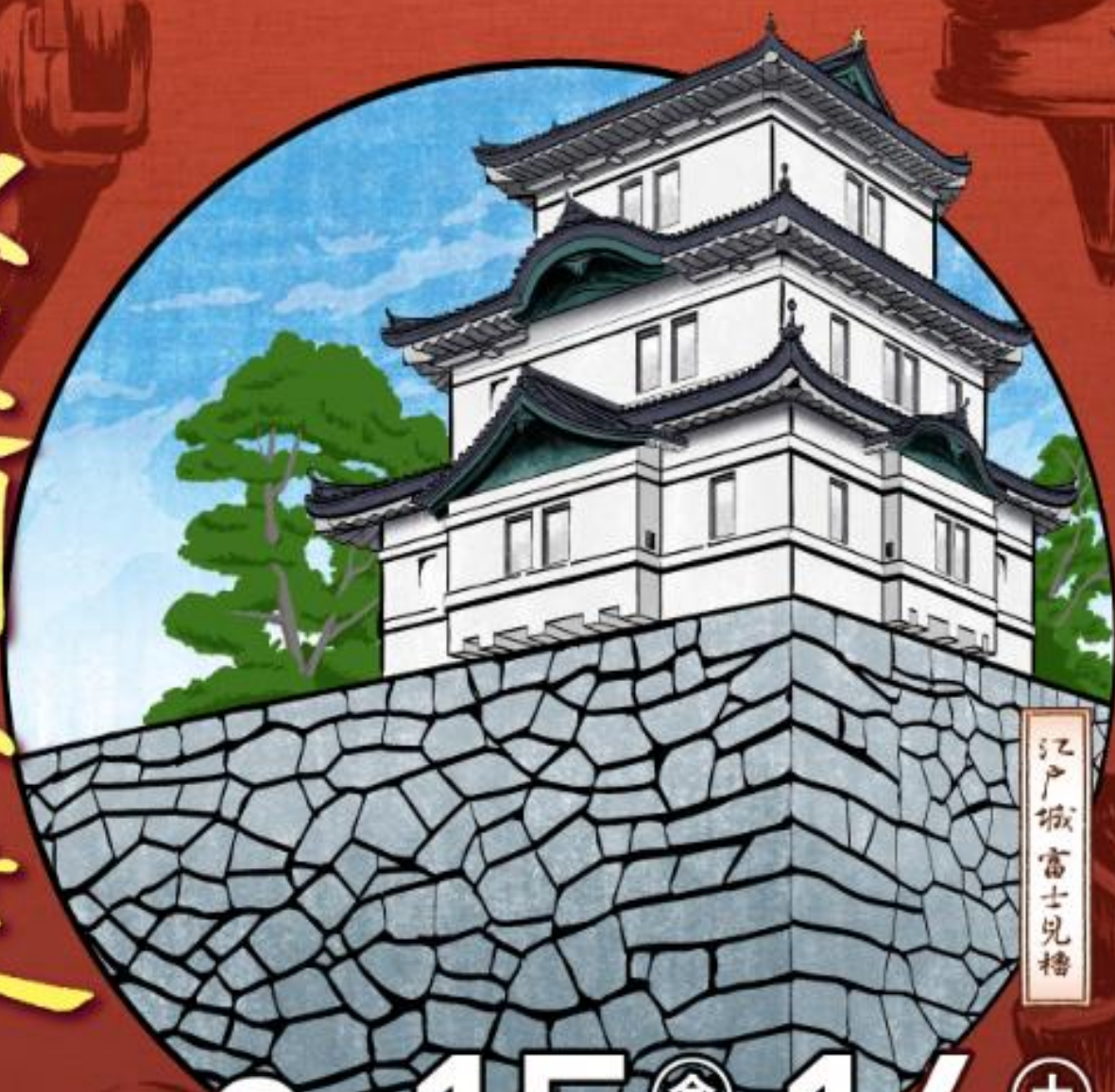


第49回 The 49th Annual Meeting of the Japanese Society
for Replacement Arthroplasty



日本人工関節学会

欲速則不達



江戸城富士見櫓

2019年2月15日(金)・16日(土)

会長 山本 謙吾 (東京医科大学整形外科学分野 主任教授)

会場 京王プラザホテル 東京都新宿区西新宿 2-2-1

SubVastusアプローチによるCruciate Retaining 人工膝関節全置換術後の歩行解析

*内藤 浩平¹ (1.西の京病院 整形外科)

【目的】変形性膝関節症に対するTAK手術前後で歩行能力を客観的に評価するために、床反力計と3次元動作解析装置を用いて歩行状態を分析して、手術前、手術後3週、手術後6ヶ月で評価した。【方法】対象は膝OA患者23名36膝で、両側TKA13名26膝、片側TKA10名10膝、使用機種は全てCRタイプ、SubVastusアプローチで手術を施行した。片側と両側TKAの術前、術後3週、術後6ヶ月でストライド、歩幅、歩隔、ケイデンス、立脚期、両脚支持期、スピード、TUG、歩行角度、JOAスコアを評価した。3次元動作解析はアニメ社製ウオークWay、アニメ社製ローカス3Dで測定と解析を行った。【結果】片側TKAでは術後3週、6週とも歩幅、ストライド、ケイデンス、スピードが増加して、立脚期と両脚支持期は減少しており、歩隔と歩行角度は術後3週で拡大していたが、術後6ヶ月では改善していた。両側TKAでは術後3週では歩幅、ストライド、ケイデンス、スピードとも遅くなり、立脚期と両脚支持期は術後3週で遅延していたが、術後6ヶ月では全ての項目で改善していた。両側TKAの症例では術後2週で踵接地伸展角(6度)から立脚中期までの最大屈曲角(立脚期屈曲角)16度の立脚初期角度差が10度、立脚中期から立脚後期伸展角3度までの角度差(立脚後期角度差)が13度、遊脚期最大屈曲角52度とdouble knee actionがみられた。【考察と結論】術後6ヶ月では片側TKAでストライド、歩幅、ケイデンスが増加、両側TKAではストライド、歩幅が増加、また両手術とも術後6ヶ月のTUGが短縮して歩行スピードは増加していた。TKA術後2週でのdouble knee actionが認められたことから、SubVastusアプローチで大腿四頭筋を切開しないTKA手術では術後早期に膝伸展機能が働き、通常の歩行周期を獲得しやすいと考える。